平成30年度 神戸大学海外インターンシッププログラム 国際交流基金ブダペスト日本文化センター 就業実習報告書

国際人間科学部2年

1. インターンシップ概要

研修先:国際交流基金ブダペスト日本文化センター

研修期間: 2018 (平成 30) 年 11 月 5 日 (月) \sim 11 月 18 日 (日) 14 日間 (うち就業体験日数 は、11 月 6 日 (火) \sim 11 月 9 日 (金)、11 月 12 日 (月) \sim 11 月 17 日 (土) の 10 日間、一日 平均約 7.5 時間の就業時間)

目的:

- ① 実際の文化事業としてのイベント運営の現場に立ち会い、グローバル化の進む現代における文化事業というもの、その中でのイベントの立ち位置等を学ぶ。
- ② 日本語教育の現場に立ち、現地の人々との交流の中で外から見た日本語・日本文化を再認識するとともに様々なものに対する考え方の相違とその背景について考える。
- ③ 公的機関/海外拠点/文化事業というカテゴリの仕事の現場を知り、今後日本において就職活動を展開していく中で自分のキャリア選択をする際の比較対象となる材料を得る。また、働くという体験から新たな側面で自身を見つめなおし、新たな視点を得る。

主な実習内容

- ① 文化事業への立ち合い・補助業務
- ② 日本語講座への立ち合い・補助業務
- ③ 研修先センター物品関連事務に関する補助業務
- ④ 研修先センター事業関連事務に関する補助業務

2. 活動内容詳細

① 文化事業への立ち合い・補助業務

本インターンシップにおいて参加させていただいた文化事業は以下の3つであった。

(1) 研修先センター主催事業「津軽三味線・ピアノデュオ『シャミピア』公演 |

現在ヨーロッパツアー中の日本人アーティストを招いて、ブダペスト市内のイベント施設のような場所で無料のコンサートを開催し、100人程度の観客を動員した。日本人の私からすると、日本文化を広めるのであれば純粋な三味線の音を聞いてもらうのがいいと感じるので今回のような西洋楽器とのコラボが人気であるのは新鮮であった。日本文化を知る入り口として、そのものに触れてもらうのではなく、まずは現地の人たちの取ってなじみのあるものと織り交ぜて体験してもらい、良さを知ってもらうのだそうだ。後ろの方に座っている人たちは途中から脇に置いてあったソファへ移動している様子が見られた。これはアーティストの姿が見

たかったからだと考えられる。今回のイベントでは後ろの方の席の人はアーティストの手元や楽器がなかなか見ることができなかった。音楽だからといって耳のみで楽しむのではなく、海外の方はやはりそれを奏でている姿や楽器そのものにも関心を持っているのでその点では手元が見える工夫などがあればよかったと感じた。また、アンコールではアーティストによるコール&レスポンスがあったが、恥ずかしがっている様子があり、日本人との類似点も見て取れた。しかし、イベント終了後にアーティストの CD を購入したい、写真を撮りたいなどという観客も多くいて、表面上には出さないけれど本当に彼らのパフォーマンスを楽しんでいるのだなということが伝わってきた。

- (2) 研修先センター主催事業「尺八ワークショップ・公演」
- (3) 研修先センター主催事業「日本語プレゼンテーションコンテスト

今回はハンガリー国内の音楽関連のイベント参加が主であったが、このほかにも日本人ゲストを招いた講演会なども開催されており、様々な方面から年間を通して、ハンガリー以外の中東欧地域でも日本文化を広める活動を実施している。イベントに参加する客層は様々で、日本語講座の層とは全く異なっていた。文化イベントは、ジャンルも多様で、イベントごとにターゲットを絞ってできるだけ多くの人が参加しやすいように工夫されているため、かなり幅広い層に「日本」というものが届けられるようになっている。言語を学ぶ趣味の中で日本語を選択してくれた人たちと、純粋に文化に触れて楽しみたい人たちはタイプが大きく異なるが、基金では満遍なくアプローチできていると感じた。

② 日本語講座への立ち合い・補助業務

センター内の大小ある会議室及び図書館で開講されている夜間日本語講座と、センター外の日本語教育現場を見学・ゲスト参加させていただいた。すべての日本語教育現場において、多くの方と日本語で交流をしたがその中で私も伝わりやすい、より自然な日本語を意識して話すことができるようになったと思う。日本で「やさしい日本語」というものを本で読んだり、翻訳の授業で学んでいたが、それを実践するのは非常に難しく彼らとの交流を通して初めて理解することができたように思う。

(1) ブンファルビ・ヤーノシュ高校での日本語授業見学

日本の中学3年生と高校3年生にあたる9年生と12年生の授業に参加させていただいた。どちらも生徒は15名程度の少人数クラスであった。9年生は今年の9月から日本語を学び始めたばかりで、初歩の基本的文法をアプリのクイズなどを用いながら楽しく学習していた。12年生は卒業間近ということもありあまり勉強に身が入っていない様子であったが、試験で日本語を用いる生徒などのために試験対策的内容を含む授業になっていた。また、12年生の授業では1人の生徒が「偏見」についてプレゼンをしてくれた。なかなか難しいテーマであったがしっかりと調べたうえで一生懸命プレゼンをしていた。偏見についてクラスでディスカッションしたところタトゥーや鼻ピアスなどに対する意見が多く聞けた。日本ではそのいずれも悪

い印象があると伝えると、それらはおしゃれであるし、悪いイメージに正確性はないと反論が返ってきた。そのような文化差があるということを知識として持っていただけではわからない彼らの熱量のようなものを感じることができた。

(2) ELTE 大学日本学科の授業見学

ELTE 大学はブダペスト市内にある唯一の総合大学でハンガリーの東大といわれている大学で、日本学科はじめ様々な学科がある。この学科の先生は日本の方で、授業にはよく日本人留学生などのゲストが来るようだった。今回は卒業論文のテーマを少人数グループになって発表してもらい、それについてディスカッションする形式だった。テーマは、怨霊から天神になった菅原道真や、日本人の苗字、仏教の物語、広島原爆、女の妖怪など多岐にわたるもので非常に興味深かった。当初想像していたものよりも非常にマニアックなテーマが多く、定番の茶道や能などの日本文化ではないことに驚いた。一口に日本の文化といえども、歴史や宗教、生活なども関心を集めているのだということに気付いた。

(3) 夜間日本語講座への立ち合い・見学

センターでは週に 2 回開講される日本語能力ごとに G2A~G5 にクラス分けさ れた総合コースとトピックコース、1か月に1回開講される単発の文化コース、学 習内容・計画などは自分で決めて教師にサポートをしてもらう自律学習コース、そ して新たに 2 週間に 1 回のネット上でのライブレッスンを受ける e-learning コー スが設置されており、受講生は 10 代から 60 代まで非常に幅広い。総合コースで は授業が1回90分で、文法単位で学ぶのではなく、「カフェで注文ができるよう になる | などの具体的な行動をゴールに設定し、そのために必要な表現や文法を学 ぶ形式になっている。これは日本の英語教育や、文型の学習を中心とする外国語教 育とは大きく異なる点であり、より実践的でわかりやすい形式だと感じた。趣味で 日本語を学んでいる人たちが集まっているからこそ、試験のための勉強ではなく、 日本語で何ができるかに焦点を当てた授業を目指していると言える。今回総合コ ースのすべてのクラスに参加させていただいたが、どのクラスでも受講生たちは 非常に積極的に日本語を使おうとしていた。彼らの受講動機はほとんどがアニメ やマンガなど、日本のポップカルチャーに関心があるからであり、ハンガリー国内 でもモンドコンとよばれる日本のイベントが年に 4 回定期的に開催され一大イベ ントとして定着しているという話を聞き、日本のソフトパワーの影響力を実感し た。週に2回行われる授業は1回が日本人、もう1回がハンガリー人の先生によ るもので、日本人の先生の時にはほぼすべて日本語で会話をし、実践練習のような 形式であったが、ハンガリー人の先生の時には理解があいまいな日本語をハンガ リー語で解説したりしており、日本語の正確な意味理解も同時にしっかりと行え ていて言語を学ぶ上でこの二つがあることは重要なプロセスだと感じた。また、今 回の実習中はちょうど中間発表の時期であったため、受講生によるハンガリー料

理の作り方や、ハンガリーのおすすめ地域などの発表を聞くことができた。彼らの発表に対して質問をしたり意見を言ったりすることで交流を深めるいいきっかけにもなった。トピックコースでは、すべて日本語で日本の神についての講義を聞いた。形態は少人数で先生の話を聞き、意見や質問をみんなで話し合うもので、内容と合わせても日本の大学のゼミとほとんど変わらないと感じた。このクラスはほとんど日本語の解説は行わないので、かなり高レベルの日本語能力をもった人たちが参加していたように思う。

③ 研修先センター物品関連事務に関する補助業務

本インターンシップにおいてさせていただいた補助業務は以下のものであった。

- (1) 小型巡回展「日本の古代服飾史」キットの整備
- (2) 小型巡回展「出初式」キットの整備

このキットはトロント日本文化センターから入手したものだった。このようなキットはセンターで保管し、外部からイベントで使用したいという依頼が来た際に貸し出すもので、このような展示キットの他にけん玉などの日本の伝統的な遊び、浴衣などもある。今回は上記 2 つのキットに関連する情報を収集し、取り扱い・説明資料を作成した。「日本の古代服飾史」には資料がついていたものの情報量が少なく、「出初式」に関しては情報がほとんどなく、私自身もどのようなものなのか全く分かっていなかったのでネット上でできる限り多くの情報を収集し、間違いのないよう気を付けて作成した。日本語版英語版の2種類を作成したが、英語訳はできるだけわかりやすいように気を付けた。今回この資料を作成したことによって私自身も日本文化を学ぶことができたので非常にいい経験になった。また、学内の活動で同様の資料を作成した経験があったので、できるだけ見やすいものにするなど、それらの経験を活かすことができたと思う。

(3) 外部配布資料の整理

外務省が作成して各地に配布している「にぽにか」という冊子の在庫管理をおこなった。この冊子は英語版日本語版 2 種類が毎回発行されており、日本の伝統的な文化をはじめ、ポップカルチャー、最新技術、自然など様々なジャンルを取り扱って、「日本」というものを幅広く紹介している。ハンガリー国内で行われるモンドコンなどの日本のイベントや日本語の講座で配布されている。

センターに届けられる日本の大学や語学学校、フェローシップなどの案内資料の整理と、大学名/年度/資料内容をまとめたリスト作成と、フェローシップの内容/応募条件/締め切り/リンクをまとめたリスト作成もおこなった。日本全国から資料が届けられており、それらを見て日本へ留学を決める人もいるのだということを実感した。私が作成したリストは今後の資料管理ベースとして使用される予定である。

3. ブダペスト滞在に関して

基本的に治安はよい方で女子一人の滞在であったが、夜間に出歩かない・細くて暗い路地には近づかないなど基本的なことさえ気を付けていれば身の危険を感じることはほとんどなかった。ただ、路上で生活し、物乞いをする人々の姿を多く見かけた。彼らの多くはロマ人であると考えられる。彼らは話しかけてきたり、襲ってくることはないため気にしないようにすれば害はなく、他の多くの人もそのようにしていて日常の光景となっているようだった。今回の滞在期間中に年に2度ある各区で自由に普段処理できないごみを捨てていい日、いわゆる粗大ごみの日があたってしまい、その日は事務所と宿舎のあるブダペスト第6区の道路に粗大ごみがあふれていた。そしてその周辺には、リサイクル可能なゴミを囲い込むため縄張りを設けようとして殺気立った人達が街中に立っており、少し危険を感じた。しかし、この光景も次の日の朝に清掃車が来てごみを回収してしまえば元通りに戻る。

現地到着当日は、ホテルから頻繁に聞こえるサイレンに少し戸惑ったが、ハンガリーの 人は鼻血でも救急車を呼ぼうとするなど、救急車が頻繁に出動するということだったので 心配する必要はない。

オフィスもブダペスト中心地、大通り、トラム停留所のすぐ近くという好立地にあるので非常に便が良く、安心できる。

生活も非常にしやすい。ブダペスト中心部は SPAR や Prima、dm といったスーパーや、ABC というコンビニのような店がいくつもあり、食料品から洗剤等基本的な生活に必要なものは取り揃えてある。オフィス周辺にはレストランも数多く立ち並んでいるので食べ物に困ることは一切ないので滞在先としては安心できる。しかし、街では喫煙者が非常に多く、路上を歩けば必ずたばこの煙に包まれるのでたばこの煙が苦手な人にはあまり向かないと思う。ハンガリーでは屋内での喫煙が一切禁止されているため、路上での喫煙者が目立つようだ。逆に言えばレストランやホテルなどの屋内での喫煙者は一切いないので空気がよかった。

4. 個々の目標に対しての意見及び感想

① 実際の文化事業としてのイベント運営の現場に立ち会い、グローバル化の進む現代 における文化事業というもの、その中でのイベントの立ち位置等を学ぶ。

今回参加させていただいたイベントは、いずれも私が当初想像していたようないわゆる「純粋で典型的な」日本文化の紹介イベントではなく、現代的・西洋的文化と融合した形のものであったり、日本人にとってあまりなじみのないものだったりして、非常に意外に感じました。これらのものがイベントとして企画されたのは、現地スタッフの方の意見であったり、現地の人々にとっての受け入れやすさなどに基づく考えからであることを教えていただきました。我々が想像していたり、受け取ってほしい形で文化を提供するのではなく、その地域にあった形で考えることが重要であるということを学びました。また、イベント内で通訳をしてくださった方とお話をして、芸術や音楽、精神的な分野に関する通訳はその知識が必要となり、単なる言葉の通訳をするだけでは伝わらないこともあるので非常に難しいということを知りました。イベントに関して

は、効果を最大限に引き出すためには通訳の方との意思疎通が重要であるということを認識しました。

- ② 日本語教育の現場に立ち、現地の人々との交流の中で外から見た日本語・日本文化を 再認識するとともに様々なものに対する考え方の相違とその背景について考える。 いかに日本の漫画やアニメ、音楽といったソフトパワーが世界に影響力を持つのかを 実感しました。しかし、それだけでなく、日本語の発音の美しさや漢字の見た目に惹か れる人も一定数いるということを知り、日本語を学ぶきっかけは自分が考えているよ りも幅広く、それだけ日本や日本語の魅力はまだまだあるのだと教えられました。学習 教材としては、一般的な教科書などの紙媒体の他に、アプリのクイズや Facebook、 YouTube など多岐にわたっていました。研修先センターでもネット上の講座を設けて おり、日本語学習の機会が広げられていたのは非常に興味深いと思いました。
- ③ 公的機関/海外拠点/文化事業というカテゴリの仕事の現場を知り、今後日本において 就職活動を展開していく中で自分のキャリア選択をする際の比較対象となる材料を得 る。また、働くという体験から新たな側面で自身を見つめなおし、新たな視点を得る。 現地の一般の方やゲストの方々、生徒の方々など様々な人との関わりを持ちながら、そ の中で人々に求められる興味や楽しみを提供するという仕事を体験させていただき、 自分自身多くの刺激を受け、楽しませていただき非常にいい経験となりました。

5. 最後に

今回のプログラムでは、研修先センターの日本人スタッフの方や現地の職員さん、同世代のライブラリアンの学生さんやイベントにいらっしゃった一般の方、通訳の方、現地の高校生、大学生教師の方など本当にたくさんの方々と出会い、様々なお話をさせていただきました。どの方々からも学ぶことはたくさんあり、非常に楽しく、自らの考え方やものの見方などをさらに豊かにすることができたと感じています。実際に働くという経験を通しても、自分にできること、まだ足りていないところなどご指導をいただく中で実感することができ、客観的に自らを見つめなおすということが自然にできたと思っています。今後の大学生活をよりよくし、さらに卒業後の進路を考えるうえでも非常にいい経験となりました。自ら様々なもの事に関心を持ち、勇気をもって、積極的に様々な人と関わり学ぶということを意識していきたいと思います。最後になりましたが、今回のインターンシップで就業体験や大学見学はじめ、滞在中の生活等もサポートしてくださり、素敵な2週間をアレンジしてくださった国際交流基金ブダペスト日本文化センターの皆様にお礼を申し上げます。皆様のおかげで素晴らしい経験をすることができました。本当にありがとうございました。